



田中館愛橘 (1856-1952)

Tanaka Kenji-A. 

写真：文化勲章受章時(昭和19年4月29日) 題字：氏名サインとも田中館愛橘自署より

田中館愛橘会 会報60号

(たなかだてあいきつ) 岩手県二戸市出身の物理学者。日本の理科系諸学の基礎を築く。文化勲章。文化人切手。東大教授。貴族院議員。地球物理学の研究、度量衡法の確立、光学・電磁気学の単位の研究、航空学・気象学の普及などに功績。日本式ローマ字論者。

会長就任のご挨拶

田中館愛橘会会長 丹野明法

本年5月に行われた田中館愛橘会総会において会長に就任いたしました丹野明法と申します。本会は昭和61年に設立され今年で36年が経過しました。会の目的は『田中館博士の事績を研究し、その顕彰と普及』として、これまで博士に関する膨大な資料の研究を重ね会報を発行、ホームページで活動を紹介し、子供にもわかるようマンガ田中館愛橘博士を発行しました。そしてローマ字による書道展、田中館愛橘記念科学研究発表会が今も続けられています。また、田中館愛橘記念科学館がシビックセンターに二戸市よって整備され、その後シビックセンター正面入り口前に市内外の多くのご寄付によって博士の銅像を建立することができました。

毎年、5月の博士の命日に合わせて行われる当会総会では田中館博士の業績や活躍した時代背景、生い立ちに至るまで様々な角度から多くの著名な方にご講演をいただいております。

本年は田中館博士没70年の節目の年として二戸市でも記念講演会が市民文化会館で行われシビックセンターでは特別展示が行われました。博士は江戸末期に生まれ、日本にまだ科学のない時代に『理学を通じ国に貢献する』ことを求め、幼少時には髻だった少年は外国人教師に学び、研究者として実績を重ね同時に多くの科学者を育てました。活躍の場は純粋物理学にとどまらず、航空学・度量衡・ローマ字など領域を超えた研究に情熱を注ぎました。

博士が晩年『50年後の夢』と題しローマ字で書かれた文を残しています。文の結びに「多くの国民が、同じ人間たちを敵として戦うために、沢山の費用をかけて軍備に励んでいる。これらを差し控えて、自然の敵なる地震、雨風の大嵐や津波などに向かって戦いを挑み、これらを征服したらどんなに世界が楽になるだろう!!」と記されています。

私はこの博士の壮大な夢が実現できるように一人でも多くの人に田中館愛橘博士についてお伝えする活動をしてまいりたいと思います。

また、顧問に着任されます工藤武三前会長には、銅像の建立、マンガ田中館愛橘博士の発行事業を成功させるなど長年にわたり本会を牽引して頂きましたことに衷心より御礼申し上げます。

結びに、会員各位におかれましては、会の運営のためのご意見や博士についてお知らせしたいことなどありましたらご連絡ください。皆様のご協力を賜り大役ですが任期を努めさせて頂きますのでよろしくお願い申し上げます。

明治・田中館愛橋の留学費用

— 公費留学を検証する —

田中館愛橋会副会長 菅原孝平

1. はじめに

本年は郷土の先人、二戸市名誉市民である文化勲章受章・田中館愛橋博士没後70年にあたる。

博士のイメージは長年「田中館博士といえばローマ字、ローマ字といえば田中館博士」という理解に終わっていたともいえる。それが1986年に顕彰団体田中館愛橋会が結成され、その活動の成果として1999年には田中館愛橋記念科学館が開館した。また関係機関・関係者の地道な努力により銅像の建立やマンガが発行されたほか、継続的な各種講演・展示などを通して、博士の理解がしだいに広がりを見せてきている。

本年は没後70年記念として田中館愛橋記念科学館の事業を始め、田中館愛橋会総会での没後70年記念講演『GOZYŪNEN NOTI NO YUME と地震数え唄』や、市教育委員会主催の講演『田中館先生が拓いた地球物理学の世界』（東北大学大学院小原隆博教授）が開かれた。さらに来年1月にはアーツライブ2022として『歌と語りで綴る田中館愛橋物語』の上演が二戸と盛岡で予定されている。

日本物理学の祖である博士の業績を広く伝え顕彰する活動は、今後とも二戸市にとり重要な課題である。

2. 「海外で本格的な物理学を学んできた最初の日本人」の留学

海外で本格的な物理学を学んできた最初の日本人とは誰だろうか。

日本の科学技術100年史は、田中館愛橋を「海外で本格的な物理学を学んできた最初の日本人」と解説している。田中館愛橋が日本の近代物理学の祖と呼ばれることがこの一行からでもうなずけよう。

愛橋は明治20年度・文部省留学生（6名）の一人となった。が実際に出発したのは一足遅れて翌21年（1888）1月だった。イギリス・グラスゴー大学で研究後、ドイツ・ベルリン大学を経て24年7月に帰国すると同時に理学博士、教授となった。

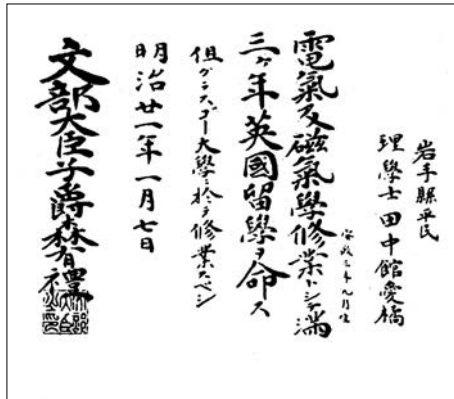
明治20年度・文部省留学生（6名）

留学国	留学生	派遣年月	専攻学科	帰国年月
独 国	坪井九馬三	20. 6	史 学	24.10
英 国	田中館愛橋	21. 7	電 気 磁 気 学	24. 7
	後藤 牧太	20. 5	理化学・手工科	23
	土方 寧	20. 6	英吉利法律学	24. 5
米 国	篠田 利英	20. 5	師 範 学 科	23
	中島 鋭治	20. 6	衛 生 工 学	23.11

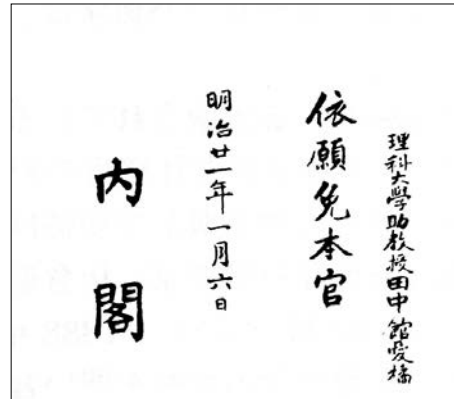
〔『近代日本海外留学生史』より〕

3. 文部省海外留学生の留学費用

二戸歴史民俗資料館編集の田中館資料第1集「辞令書等で見ると田中館愛橋博士の足跡」に、文部大臣子爵森有礼の辞令書が載っている。明治21年1月7日付きで「電気及磁気学修業トシテ満三ケ年英国留学ヲ命ス 但グラスゴー大学ニ於テ修業スヘシ」とあるから文部省海外留学生として、国費留学つまり公費留学であると考えるのは当然であろう。



〔英国留学を命ずる辞令書〕



〔依頼免本官辞令書〕

4. 私費留学説をとる文献が一

文部大臣子爵森有礼名の辞令書は、われわれにとって田中館愛橋が文部省留学生であることを証明している唯一の根拠であった。したがって留学費用は国からの支給つまり公費留学であると理解していたのは至極当然であろう。

ところが愛橋を私費留学と記載する文献が見つかったのだ。大手新聞社発行の『現代日本朝日人物事典』である。そこで他に各種人名事典類など併せて15点を点検したところ、留学費用の記載があったのは2点で、その2点とも私費留学説であった。

5. 『幕末明治海外渡航者総覧』などに見る

田中館愛橋

公費ならぬ私費留学説が見つかった以上、公費留学を上記辞令書以外で検証できる具体的客観的情報を得ることが課題となった。そして得られた最適の文献が次の『幕末明治海外渡航者総覧』と『明治21年12月末調明治21年海外留学生表』である。

(1) 『幕末明治海外渡航者総覧』

手塚晃、国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』である。これは日本の近代化、ヨーロッパの近代科学技術の導入の役割を果たした幕末・明治の海外渡航者約4,200名を項目的に解説したものだが、愛橋の渡航形態を「公費留学」としていた。

2302 田中館愛橋	
姓名(漢字)	田中館愛橋
姓名(かな)	たなかだてあいきつ
生年月日	1856年11月16日
出身教育機関	帝大、外国の高等教育機関
活動分野	学界(自然系)、政界、教育
組織における地位	施設主要スタッフ、帝国議会議員及び枢密顧問官
渡航時所属機関	文部省
渡航時地位	施設主要スタッフ
渡航先名	イギリス、ドイツ
渡航時期	1888年7月
帰国時期	1891年7月
渡航の目的	理学系(数物系)
渡航形態	公費留学
出身校名	東京大学理学部物理学科
留学先等	グラスゴー大学、ベルリン大学
出身地	岩手県
初勤務先/地位	東京大学准助教
専攻分野	電気磁気学
帰国後勤務先地位	帝国大学理科大学教授
死亡年月日	1952(昭和27)年5月21日(95歳)
顕著な業績	1. 日本全国の地磁気の測定を行うなど、わが国地球物理学の発展に貢献。 2.メートル法の採用を主張し、度量衡の単位の制定に貢献。3. ローマ字の普及に貢献
出典/参考文献	『日本人名大事典』/渡辺實著『近代日本海外留学生史』/日本学士院編『学問の山なみ』第三

〔『幕末明治海外渡航者総覧』より〕

(2)『明治21年12月末調明治21年海外留学生表』

また国立公文書館に、海外留学中の学費支給額を示す貴重な資料が所蔵されていた。表題を「明治21年12月末調明治21年海外留学生表」とする文部省総務局記録課の記録である。

田中館愛橘に関する記載事項は次の8事項である。



留 学 国 名 : 英 国
 姓 名 : 理学士 田中館愛橘
 修 業 場 所 : グラスゴー大学
 修 業 学 科 : 電気及磁気学
 修 業 年 限 : 満三年
 留学地到着年月日 : 明治21年3月22日 グラスゴー府
 備 考 : 明治21年12月グラスゴー大学物理学会副会長
 ニ推挙セラル
 欄外記載事項 : 一 留学中一ヶ年ノ学費独塊両国ハ銀貨千弍拾
 円、英仏及米国ハ銀貨千七拾円ナリ

このように、愛橘ら明治21年現在の留学生に支給する学費が明示されているが、留学先のイギリスとドイツでは支給額に若干の差があったことがわかる。ここで注目すべきは、留学して間もなくの12月にトムソン教授（後のケルビン卿）のもとでグラスゴー大学物理学会の副会長に推挙されたことである。トムソン教授が愛橘を高く評価していたことを示しているといえよう。

6. 公費留学を証明する書類の発見

以上の文献から、明治21年（1888）から24年（1901）にかけてのイギリスおよびドイツへの留学は公費留学であることが一応検証できたと考えられた。が、留学生自身である愛橘はどんな資料を残していたのか、その膨大な資料調査に当たることになった。

約1万点に及ぶ田中館愛橘資料目録がある。精査すると公費留学に関する書類が多数含まれていた。それは明治21年6月1日付けで文部省会計局長久保田譲から出された「英国留学生田中館愛橘殿」とする旅費勘定書の更生に関する照会状など13点である。

以下、順次紹介する。

(ア) 文部省会計局長からの旅費照会状

文部省会計局長からの旅費照会状には詳細な照会内容を記した付箋と、それに対する愛橘からの回答付箋がつけられていた。

外 二〇

貴下ヨリ御差出相成候別紙旅費勘定書
中更正ヲ要スル廉等付箋ノ上及御返却
条更正ノ上至急御送付可一存以候及
照會也

明治三十二年六月一日

文部省會計局長久保田 議

英國留學生
田中館愛橘殿

公 外第二〇號

計

貴下ヨリ御差出相成候別紙旅費勘定書

中更正ヲ要スル廉等付箋ノ上及御返却候

条更正ノ上至急御送付召シ度此段及御

照會候也

明治三十二年六月一日

文部省會計局長 久保田 讓

英國留學生
田中館愛橘殿

[文部省會計局長の旅費更正照会文書①]

客舎料ノ事由書明細ナルヲ要ス例へハ三月九日馬
耳塞着同日(或ハ翌何日)同地出發同日何地着翌何日
ヨリ何日迄何々ノ事由ニヨリ滞在何日同地出發翌何日
グラスゴー府着ト記ルスカ如シ而シテ若シ瀛車
中ニ一夜ヲ過シ旅店ニ宿泊セサル分ハ客舎料
支給スヘカラサル筈ニ付此内ヨリ金額扣除相成度候

〔原文解読〕

〔読み下し文〕

客舎料の事由書、明細なるを要す。例えは三月九日マ
ルセイユ着、同日(或いは翌何日)同地出發。同日何地着。翌何日
より何日迄何々の事由により滞在。何日同地出發、翌何日
グラスゴー府着と記すが如し。而して若し汽車
中に一夜を過し、旅店に宿泊せざる分は客舎料
支給すべからざる筈に付、此の内より金額扣除相成り度候。

客舎料ノ事由書明細ナルヲ要ス例へハ三月九日馬
耳塞着同日(或ハ翌何日)同地出發同日何地着翌何日
ヨリ何日迄何々ノ事由ニヨリ滞在何日同地出發翌何日
グラスゴー府着ト記ルスカ如シ而シテ若シ瀛車
中ニ一夜ヲ過シ旅店ニ宿泊セサル分ハ客舎料
支給スヘカラサル筈ニ付此内ヨリ金額扣除相成度候

[文部省會計局長の旅費更正照会文書② 局長付箋1]

三月九日馬耳港着同処一泊
 同十日馬耳港発巴里府着
 同十一、十二、二日間巴里府実験場見分
 十三日巴里府発龍頓府着
 十四、十五、十六、十七、四日間病氣ニ付龍頓府滞在
 三月十八日龍頓府発ダンデー府着
 十九、廿、廿一日三日間病氣ニ付同府滞在
 三月廿二日グラスゴー着
 流車中ニて夜ヲ過セシコトナシ

〔原文解説〕

三月九日馬耳港着同処一泊
 同十日馬耳港発巴里府着
 同十一、十二、二日間巴里府実験場見分
 十三日巴里府発龍頓府着
 十四、十五、十六、十七、四日間病氣ニ付龍頓府滞在
 三月十八日龍頓府発ダンデー府着
 十九、廿、廿一日三日間病氣ニ付同府滞在
 三月廿二日グラスゴー着
 流車中ニて夜ヲ過セシコトナシ

〔読み下し文〕

(明治二十一年・1888)三月九日マルセイユ港着、同処一泊
 同十日マルセイユ港発、パリ府着。
 同十一、十二、二日間、パリ府実験場見分。
 十三日パリ府発、ロンドン府着。
 十四、十五、十六、十七、四日間、病氣に付ロンドン府滞在。
 三月十八日ロンドン府発、ダンデー府着。
 十九、廿、廿一日三日間、病氣に付同府滞在。
 三月廿二日グラスゴー着。
 汽車中にて夜を過せしことなし。

〔文部省会計局長の旅費更正照会文書③ 愛橘付箋1〕

荷物運賃ノ事由書ニ馬耳塞ヨリグラスゴー府迄有之然トモ倫頓ヨリグラスゴー府迄ノ誤記ニ無之哉誤記ナレハ訂正ヲ要ス只瀛車賃ノ如ク外国貨幣及ヒ其相場記入ヲ要ス又支拂証明書御送付ヲ要ス其書式ハ別紙瀛車賃証明書倣シ御調整有之度

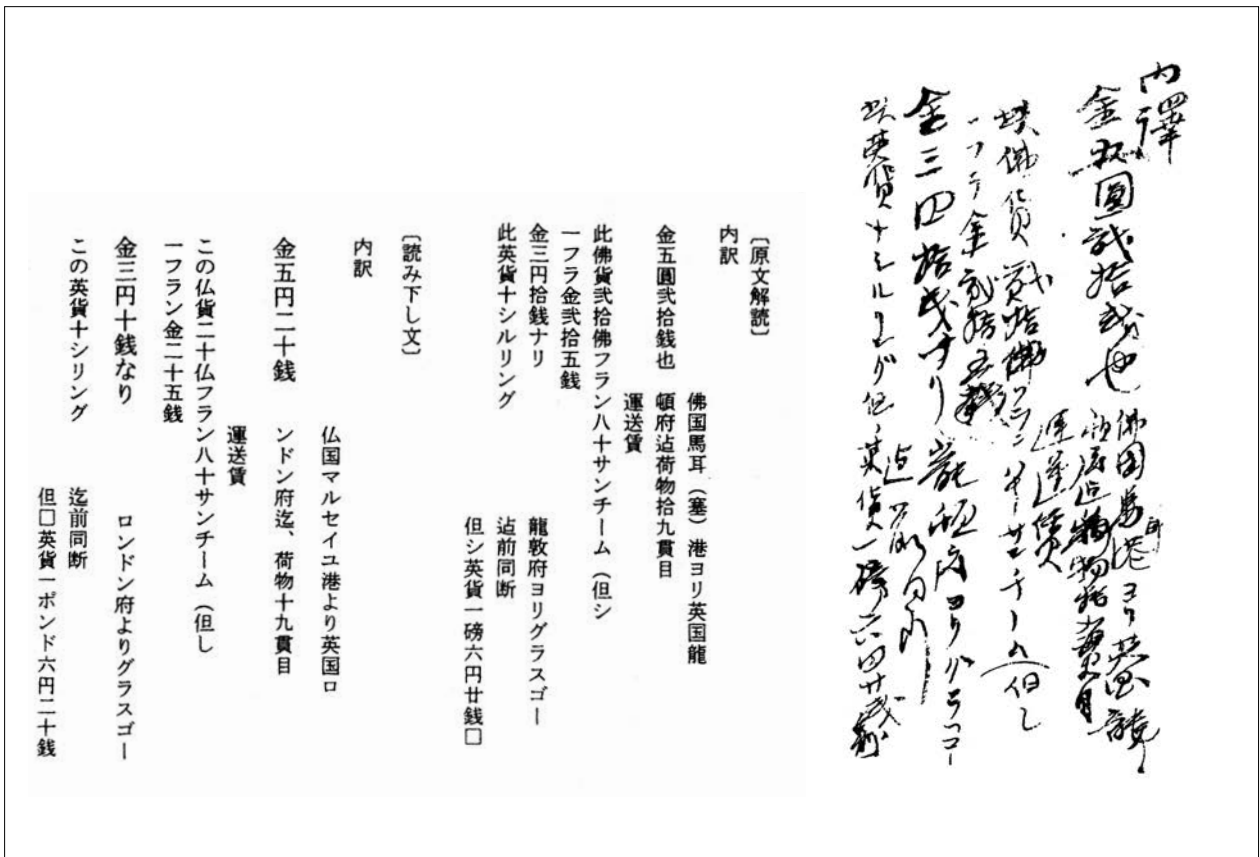
〔原文解説〕

荷物運賃ノ事由書ニ馬耳塞ヨリグラスゴー府迄有之然トモ倫頓ヨリグラスゴー府迄ノ誤記ニ無之哉誤記ナレハ訂正ヲ要ス只瀛車賃ノ如ク外国貨幣及ヒ其相場記入ヲ要ス又支拂証明書御送付ヲ要ス其書式ハ別紙瀛車賃証明書倣シ御調整有之度

〔読み下し文〕

荷物運賃の事由書に、マルセイユよりグラスゴー府迄これあり、然れどもロンドンよりグラスゴー府迄の誤記にこれなきや。誤記なれば訂正を要す。只、汽車賃の如く外国貨幣及びその相場記入を要す。又、支払証明書御送付を要す。その書式は別紙汽車賃証明書倣し、御調整これあり度し。
 (注 倣しならう、まねる、こう)

〔文部省会計局長の旅費更正照会文書④ 局長付箋2〕



〔文部省会計局長の旅費更正照会文書⑤ 愛橘付箋2〕

この旅費更正照会文書によって、主要な地名は漢字表記なのに対し、ダンデーやグラスゴーなどは現在と同様にカタカナ表記になっていることや、移動にあたって詳細な旅費精算報告を求められていたことが分かる。また当時のフランスやイギリスとの為替ルートが計算できよう。

メールどころか航空便もない時代だった。これら文書はすべて船便だったので、回答が届くまでに単純に考えて約3か月を要した。南極や宇宙船にまでも瞬時に情報が届く現代、隔世の感という言葉が浮かぶ。

さらにお土産も含まれていただろうが、留学生活に持参した荷物が19貫、約70kgだったことなども興味深いものがある。

残り12点は次号で紹介するが、いずれも明治23年から24年にかけて文部省会計局と総務局、日本銀行総裁および文部大臣官房から出されたもので、特に総務局文書にはベルリン大学への転学許可通知および転学旅費について記載されている。

(次号につづく)

